

「第2回『信楽まちなか芸術祭』」事業

地域住民が主体的に参加することによって  
陶芸の町・信楽の魅力再発見する芸術祭

存在感のあるタヌキの置物で知られる陶芸の里、信楽。3年に一度となる「信楽まちなか芸術祭」が、2013年10月1日～20日にかけて行われた。直前に台風という予期せぬ事態に見舞われたが、それを乗り越えて開催された芸術祭には多くの観客が詰めかけ、信楽の魅力を伝える企画や展示を楽しんだ。

信楽の過去・現在・未来を感じさせる  
まちなか周遊型のアート色の濃い芸術祭

2010年に続き、2回目の開催となった「信楽まちなか芸術祭」。12年7月に立ち上がった実行委員会のもと、プロデュース部会、事務局、小委員会が企画から実施運営までを担ったが、今回は「『陶とまち』—発見と創生—」がテーマとして掲げられた。

このテーマには、陶器関係者や陶芸作家だけにとどまらず、関係団体を含め、信楽に暮らす地域住民が改めて「陶」と「まち」に主体的に向き合うことで、等身大の「いままでの信楽」、「信楽の今」、「これからの信楽」を来訪者に感じてもらうとともに、自分たちも一緒になって個性ある「まち」の姿を「発見・創生」していきたいという願いが込められていた。

そのため、前回にもまして、まちなか周遊型のアート色の濃いイベントとなったが、その背景には、「陶器が売れない時代になり、従来の陶器市のようなイベントだけでは飽きられる可能性がある。そうならないようにするため、アートの要素を盛り込んだ面白いイベントを考えていく必要がある」と、実行委員会事務局の長谷川善文さんが話すように、信楽の町に対する観光客や消費者のニーズや期待の変化がうかがえる。

こうしたコンセプトは来訪者にも受け入れられ、おおむね好評だったようで、来訪者に対して行ったアンケート結果でも、「満足」、「やや満足」という回答が87%にのぼった。ひとつ残念だったのは、開催直前に台風に見舞われ、鉄道が不通になったり、一部の道路が通行止めになるな

どの影響を受け、2日間中止となったこと。それでも、約10万人と見込んでいた人出に近い9万人を超す来訪者が、期間中に滋賀県内や近畿圏を中心にして訪れた。

イベントが成功したかどうかの判断には、さまざまな観点があるが、終了後の反響もそのひとつである。その意味で、「イベントが終わった後の11月にも、信楽の町を訪れる観光客が増えました」という実行委員会事務局の杉本茂夫さんのコメントは、信楽まちなか芸術祭の成功を物語るものだろう。



「信楽まちなか芸術祭」の開会を告げるテープカット



焼き上がったオリジナルのタヌキは全部で160体



信楽の街のさまざまな場所に展示されたタヌキたち



3年に1回開かれる「信楽まちなか芸術祭」

160体のオリジナルなタヌキの野外展示や  
住民が自ら企画したプロジェクトの数々

今回の芸術祭は、「まちなか」と「滋賀県立陶芸の森」をメイン会場に、さらに近隣の「MIHO MUSEUM」も加えて実施された。まちなか会場で中心となったのは「『THE TANUKI』—たぬき・狸・タヌキ?—」と銘打たれたプロジェクトで、信楽在住の陶芸作家を中心に、120cmの原型を使って信楽の代名詞ともいえるタヌキの置物を独自の感性でオリジナルに160体製作してもらい、それを町の各所に展示するというもの。まさに伝統とアートが融合した企画で、このタヌキを目当てに、まちなかを回遊する来訪者が多くいた。今も町を歩くと、その一部が展示されている光景に出会うことができる。

また、住民が自ら芸術祭を盛り上げるために、まちなかを舞台として楽しめる企画やイベントを発想・実施したのが「住民まちなかプロジェクト」で、30以上のプロジェクトが展開された。その中には、社会福祉法人しがらき会信楽青年寮と滋賀県立陶芸の森／世界にひとつの宝物づくり実行委員会が協同で行った「まち角から～それぞれの心、それぞれのかたちで～」、窯元散策路のwa+有志窯元による「窯元工房見学」、信楽商店協同組合+有

担当者より



パブリシティをはじめ、AJOSCからの助成を有効活用できました。

信楽まちなか芸術祭実行委員会  
信楽焼振興協議会事務局局長補佐  
長谷川善文さん

前回に引き続き、今回も助成をいただきありがとうございます。おかげさまでパブリシティを充実させることができたため、テレビをはじめとするマスコミに取り上げられる機会も増え、ほぼ想定した通りの来訪者数を確保でき、結果的に計画通りの規模で無事、芸術祭を実行することができました。

志協力店による「手拭いスタンプラリー」などが好評だったという。

陶芸の森会場では、「想いをカタチに」をテーマにした50名の作り手による「信楽からつたえたいコト展」、日本各地の陶器産地のお茶漬け碗を集めた「お茶漬けを食べる日企画『あなたはどれで…お茶漬け碗』」、信楽で発掘調査された16世紀末の窯を再現した「金山窯」や登り窯を焼成するプロジェクト、セラミック・アート・マーケットなどが行われた。

この芸術祭は3年ごとに開催されるトリエンナーレになっており、実行委員会事務局の石野啓太さんは、「たとえば自治会などとも一緒になり、さらに陶器関係者以外が参加できるような仕掛けを作っていきたい」と、次回開催に向けての抱負を語った。3年後の第3回目を楽しみに待ちたい。



期間中、さまざまなプロジェクトを楽しめるのも魅力